

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第141集

下岩沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書

国道107号改良工事関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

下岩沢 I 遺跡発掘調査報告書

国道107号改良工事関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が存在し、7,300箇所におよぶ遺跡が確認されております。これら先人が残した文化遺産を保護し、保存して行くことは県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な一施策であります。特に幹線道路網の整備は、産業経済開発の動脈として多方面から期待されるところであります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的な課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書の下岩沢Ⅰ遺跡は、北上川支流の和賀川右岸に立地する遺跡で、昭和62・63年の発掘調査によって縄文時代から弥生時代にかけての若干の遺構と遺物が発見されました。ひき続き出土資料等の整理をすすめ、ここに報告書として発刊するはこびとなりました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御援助、御協力を賜りました和賀町教育委員会はじめ、関係各位に衷心より謝意を表します。

平成元年5月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 中 村 直

例 言

1. 本報告書は、岩手県和賀郡和賀町岩沢第9地割12の2ほかに所在する下岩沢I遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
遺跡台帳番号は、ME52-2068である。
2. 本遺跡の調査は一般国道107号道路改良工事に伴う緊急発掘調査である。調査は岩手県土木部北上土木事務所と岩手県教育委員会事務局文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 本遺跡の発掘調査面積、調査期間、整理期間は、次のとおりである。

発掘調査面積	3,832㎡
調査期間	昭和62年4月7日～4月30日、昭和63年4月8日～4月25日
整理期間	昭和62年11月2日～11月30日、昭和63年11月1日～11月30日
4. 遺跡の発掘担当者は、次のとおりである。
昭和62年度田村壯一、佐々木嘉直、昭和63年度田鎖壽夫、斎藤邦雄
5. 発掘調査に際しては、和賀町教育委員会の御協力をいただいた。
6. 本遺跡から出土した石器の石質鑑定は、佐藤二郎氏（佐藤地質工学研究所）に依頼した。
7. 本報告書の執筆は田村壯一と田鎖壽夫が、編集・校正は田鎖壽夫が担当した。
8. 野外調査にあたって、和賀町の方々の協力を得た。
9. 発掘調査に伴う諸記録及び出土遺物は、S I I—87、S I I—88の遺跡略号を付して岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

序		1 調査の方法	3
例言		2 室内整理	4
I 調査に至る経過	1	IV 検出された遺構と遺物	
II 遺跡の立地と環境		1 ピット	13
1 遺跡の立地	2	V 遺構外出土遺物	
2 遺跡の土層	2	1 土器	18
3 周辺の遺跡	3	2 石器	19
III 調査の方法と室内整理		VI まとめ	25

図版目次

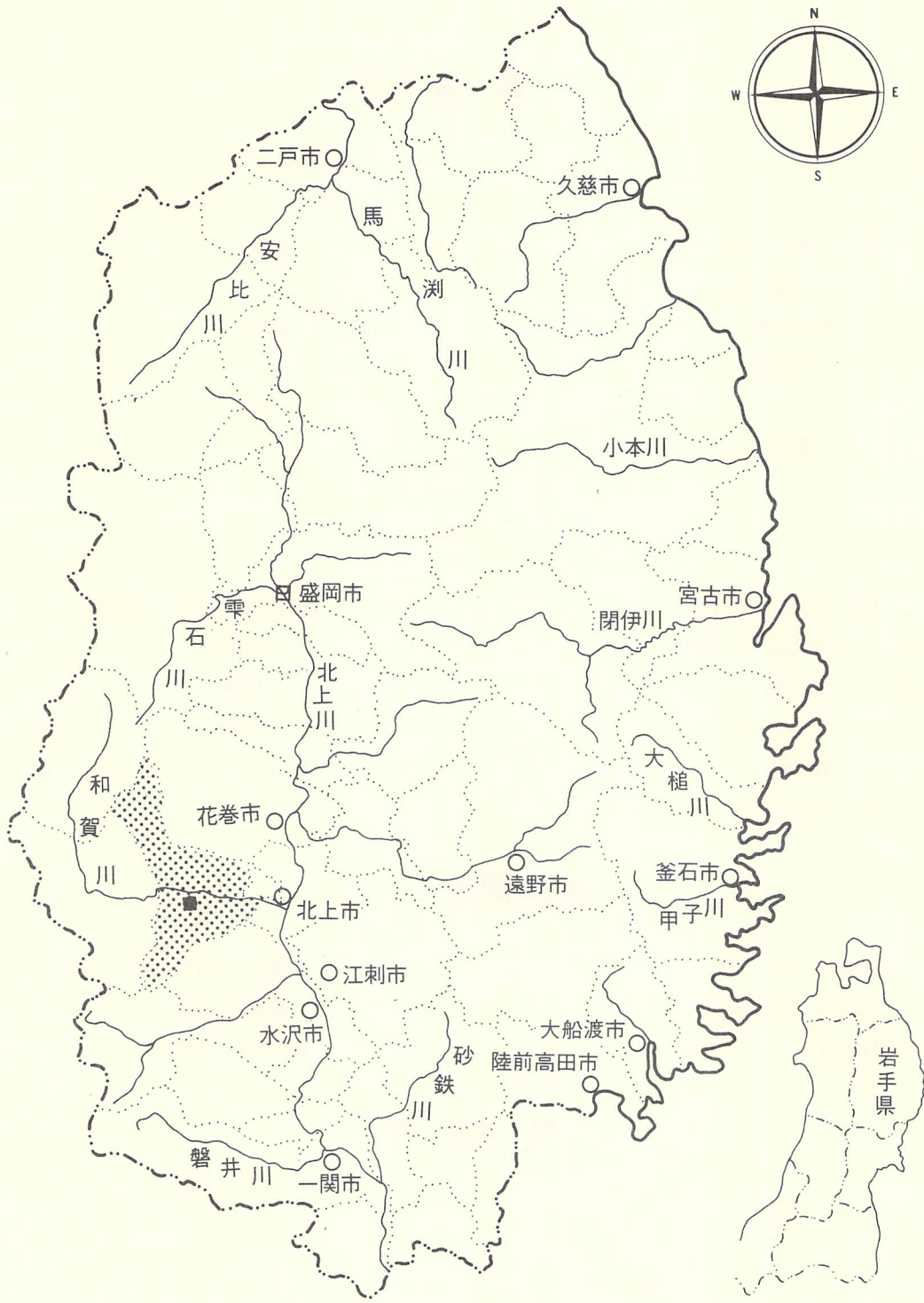
第1図 改良路線と遺跡	1	第7図 ピット(2)・遺構内出土遺物	17
第2図 遺跡周辺の地形図	5	第8図 遺構外出土遺物(土器)	21
第3図 周辺遺跡分布図	7	第9図 遺構外出土遺物(石器1)	22
第4図 グリッド配置図	9	第10図 遺構外出土遺物(石器2)	23
第5図 遺構配置図	11	第11図 遺構外出土遺物(石器3)	24
第6図 ピット(1)	16		

写真図版目次

写真図版1 ピット(1)	29	写真図版4 遺構内・遺構外出土遺物(1)	32
写真図版2 ピット(2)	30	写真図版5 遺構外出土遺物(2)	33
写真図版3 ピット(3)	31	写真図版6 遺構外出土遺物(3)	34

表目次

石器計測一覧表	26
---------	----



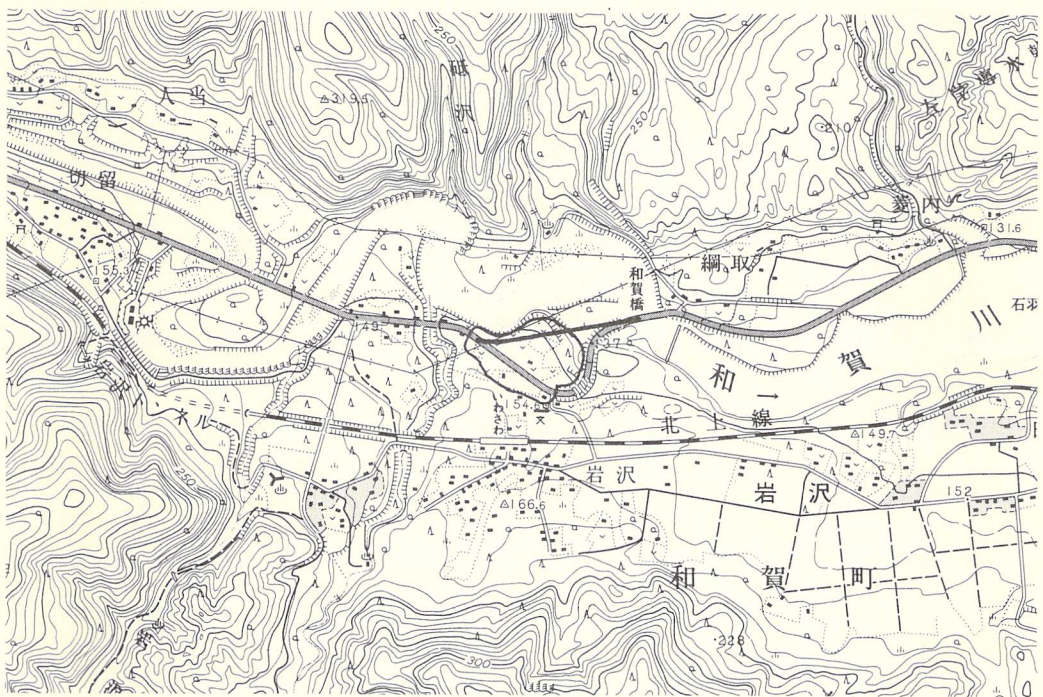
岩手県全体図

Ⅰ 調査に至る経過

和賀町岩沢の一般国道107号道路改良工事は、和賀町岩沢9地割26-3から同9地割20-19まで総延長520m、幅員11mの線形改良工事であり、昭和57年に着工し、平成3年に完成の予定である。

これにかかわる埋蔵文化財の取扱いについては、岩手県土木部、北上土木事務所と岩手県教育委員会との間で協議された。昭和61年7月9日、和賀町教育委員会から周知の遺跡である下岩沢Ⅰ遺跡付近の工事に伴う事前協議の照会があり、岩手県教育委員会文化課では、年度内における遺跡内の工事着手予定のないことを確認した。その後、同文化課は「教文第291号」により、昭和62年度における埋蔵文化財関連土木工事等の照会を行い、現地確認のうえ、同10月22日事前の発掘調査を要する旨回答した。その後、さらに両者間で協議が行われ、昭和62・63年度において発掘調査を実施することとした。

これにより、昭和62年度及び63年度の岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの発掘調査事業計画に組み入れられ、当センターは昭和62年4月1日及び同63年4月1日付け契約により、それぞれ調査に着手することとなった。



第1図 改良路線と遺跡

II 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の立地

下岩沢Ⅰ遺跡は北上市より西へ約15kmの地点、東日本旅客鉄道北上線岩沢駅の北方約300mの国道107号沿いに位置する（第2図参照）。

和賀郡は岩手県中央からやや南寄り、北上市をはさんで東西に町村をもつ郡である。西は奥羽山脈の三森山（1102m）、白木峠（602m）、真昼岳（1060m）、和賀岳（1440m）などの山々が、北はモッコ岳（1278m）、須賀倉山（941m）、東根山（928m）などの山々が、南は牛形山（1340m）、駒ヶ岳（1130m）などの山々が峰を連ねる。東は南下する北上川の両岸に発達した河岸段丘平野が南北に延びる。この平野の東側は北上高地の西辺にあたり、低い丘陵が南北に続いている。

和賀川は秋田県仙北郡と境する和賀岳に源を発し、郡内を貫流する途中、横川、本内川、尻平川、夏油川などの諸支流と合流し、北上市において北上川に合流する。この和賀川中流沿岸は下方浸食と曲流が顕著で、多くの段丘が発達している。これらの段丘は、現況濫原を除いて上位段丘、中位段丘、下位段丘に大別される。

本遺跡はこの中流右岸の下位段丘の低位面に載っている。標高は147～151mである。

2. 遺跡の土層

遺跡の土層は、主に河岸段丘特有の砂礫層によって構成されるが、調査区東側、中央、西側ではその層位に若干の差異が認められる。基本的には次の4層に大別できる。

I層 表土及び耕作土 上位は砂質性が強い。下位は粘性のある褐色土が強い。遺物を包含する。層厚は30～40cmである。

II層 にぶい黄褐色土と暗褐色土との混土 西側は礫を多く含む。この層が遺構検出面で少量の遺物を包含する。層厚は15～20cmである。

III層 褐色土～黄褐色土 西側は粘土質シルトから砂質土、東側は砂質土である。地区によっては部分的に礫を含む。層厚は10～60cmで層に起伏が認められる。

IV層 砂礫層 東側では径10cm以下の円礫が、西側では径20～50cm大の円礫が多い。層厚は2m以上である。

3. 周辺の遺跡（第3図）

周辺の遺跡をあげると、代表的な遺跡として和賀仙人遺跡があげられる。この遺跡は昭和40年と翌年の二次にわたって調査が行なわれ、段丘構成層から旧石器を確認している。

和賀川左岸に立地する遺跡のうち、調査された主な遺跡では鳩岡崎遺跡（縄文、奈良～平安時代の竪穴住居跡、フラスコ状ピット等）、藤沢遺跡（旧石器、平安時代の竪穴住居跡等）、九年橋遺跡（縄文時代晩期）等が上げられる。また右岸に立地する遺跡では下成沢遺跡（旧石器、平安時代の竪穴住居跡等）、滝ノ沢遺跡（縄文時代）、梅ノ木遺跡（縄文、古代・中世住居跡、掘立柱建物跡、土壌等）、岩崎台地遺跡群（平安時代の竪穴住居跡、炉・焼土遺構、土坑、陥し穴等）等が上げられる。

古墳については和賀川左岸に長沼古墳群、五条丸古墳群、猫谷地古墳群が立地する。

参考・引用文献

草間俊一他（1974）	長沼古墳	和賀町教育委員会
菊池強一他（1975）	大台野遺跡	湯田町教育委員会
菊池啓治郎他（1977）	和賀町史	岩手県和賀町
吉田 努他（1981）	東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書IX岩手県文化財調査報告書第58集	

III 調査の方法と室内整理

1. 調査の方法

(1) 座標軸の設定と調査範囲内の区画について

調査範囲内に次の2点を設定した。

基点1 X=1,000.00 Y=4,503.00

基点2 X=1,000.00 Y=4,563.00

この2点のうち、基1を座標原点とし、原点と基2を結ぶ線と、原点を通りこれと直交する線を基準線とした。この2直線をもとに、調査範囲全体を20m毎に大区画した。各区画は最北西から最東端にむかってA・B…のアルファベットを付し、A区・B区…のように呼称した（第4図参照）。

この各区画をさらに4m毎に小区画し、小区画には西から東にむかってa～eのアルファベットを、北から南にむかって1～5の数字を付し、この両者の組み合わせによって、a2・c5のように呼称し、大区画の中の位置関係を把握できるようにした。

(2) 粗掘り、遺構検出、遺構の呼称について

調査範囲内のうち調査区西端のA～F区と、最東端のN～O区は狭い部分や段差があるため人力で表土を除去したが、調査区中央部のG～M区については重機を使用した。表土を除去した後は作業員によって遺構を検出した。

検出された遺構は、前述した大区画名と小区画名を組み合わせ、例えば、B1cピット・I4eピット…のように呼称した。1つの小区画の中に複数の遺構が検出された場合は、さらに数字を付し、例えば、N2c-1ピット・N2c-2ピット…のように呼称した。

(3) 精査方法

精査は住居跡状遺構を4分法、ピット類を2分法としておこなった。図面の作成と写真撮影は精査の各段階に、必要に応じておこなった。

(4) 実測方法

遺構は調査区の西端と中央部及び最東端の3ヶ所に限られて検出されたため、その3ヶ所に簡略的な遣り方を設定して実測した。

遺構の実測図は1/20の縮尺を基本とした。レベル計測は50cmの間隔を基本としたが、遺構の中には細かい間隔での計測を心がけた。

2. 室内整理

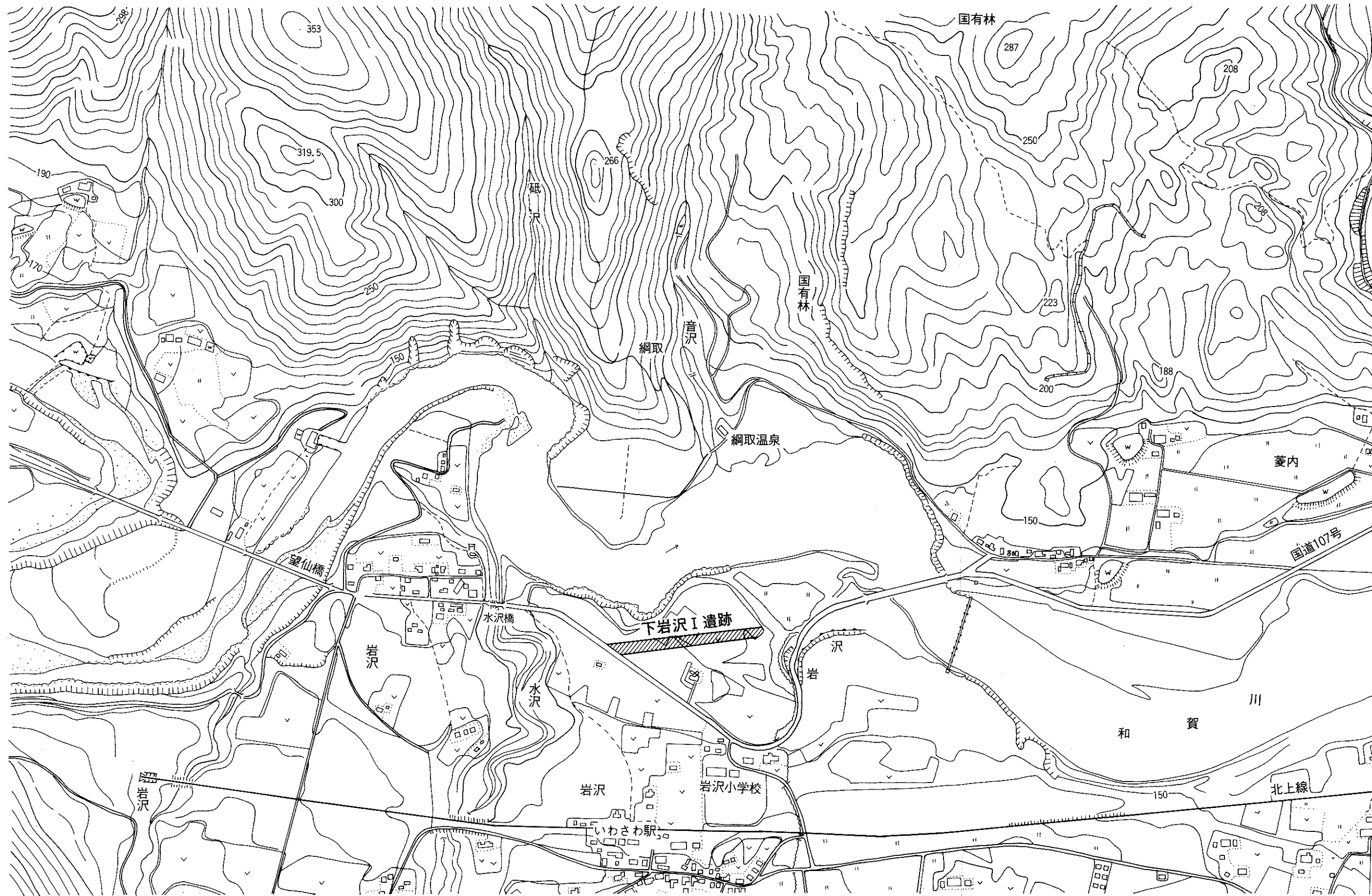
整理作業は、昭和62年度と63年度に、それぞれ1ヶ月間ずつおこなわれた。年度毎の主な作業内容は、次のとおりである。

〔昭和62年11月2日～11月30日〕

- ・ 調査区図面や遺構図面の点検
- ・ 遺構写真の整理
- ・ 土器の接合・復元、遺物の実測
- ・ 遺物の原稿執筆

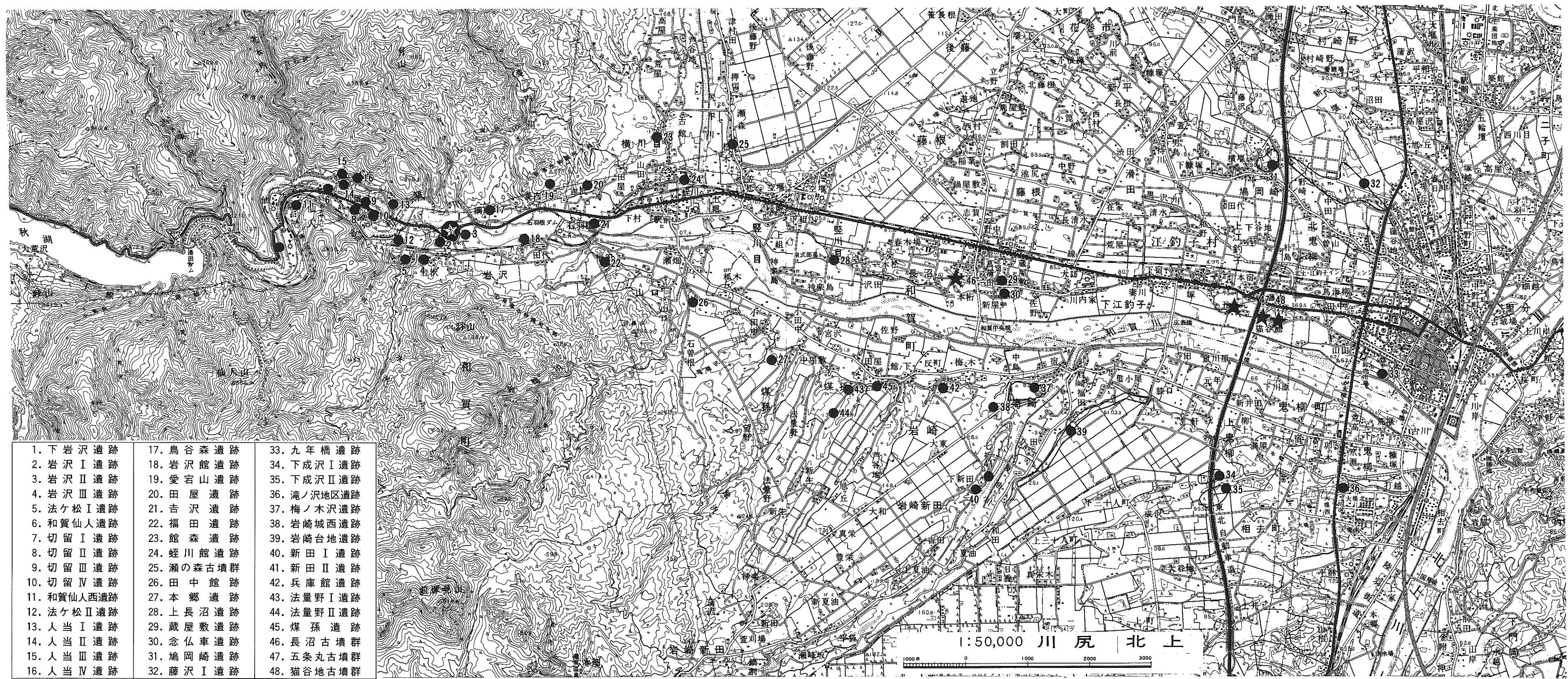
〔昭和63年11月1日～11月30日〕

- ・ 遺構図面の点検、トレース、図版作成
- ・ 遺構写真の整理
- ・ 遺物の実測
- ・ 遺物の写真撮影、写真図版作成
- ・ 原稿執筆
- ・ 報告書作成



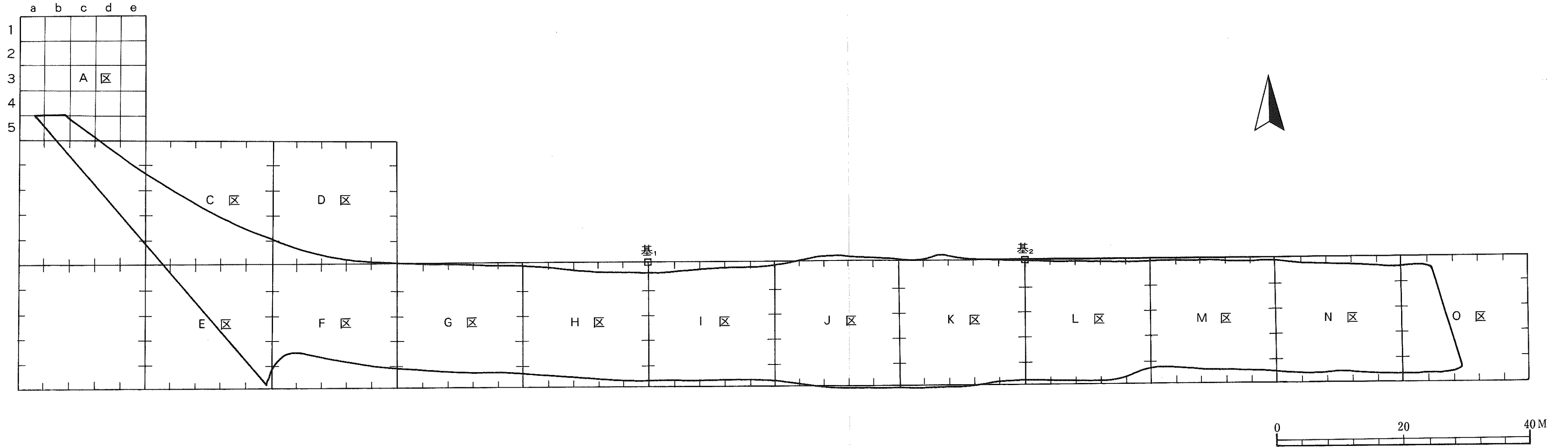
第2図 遺跡周辺の地形図



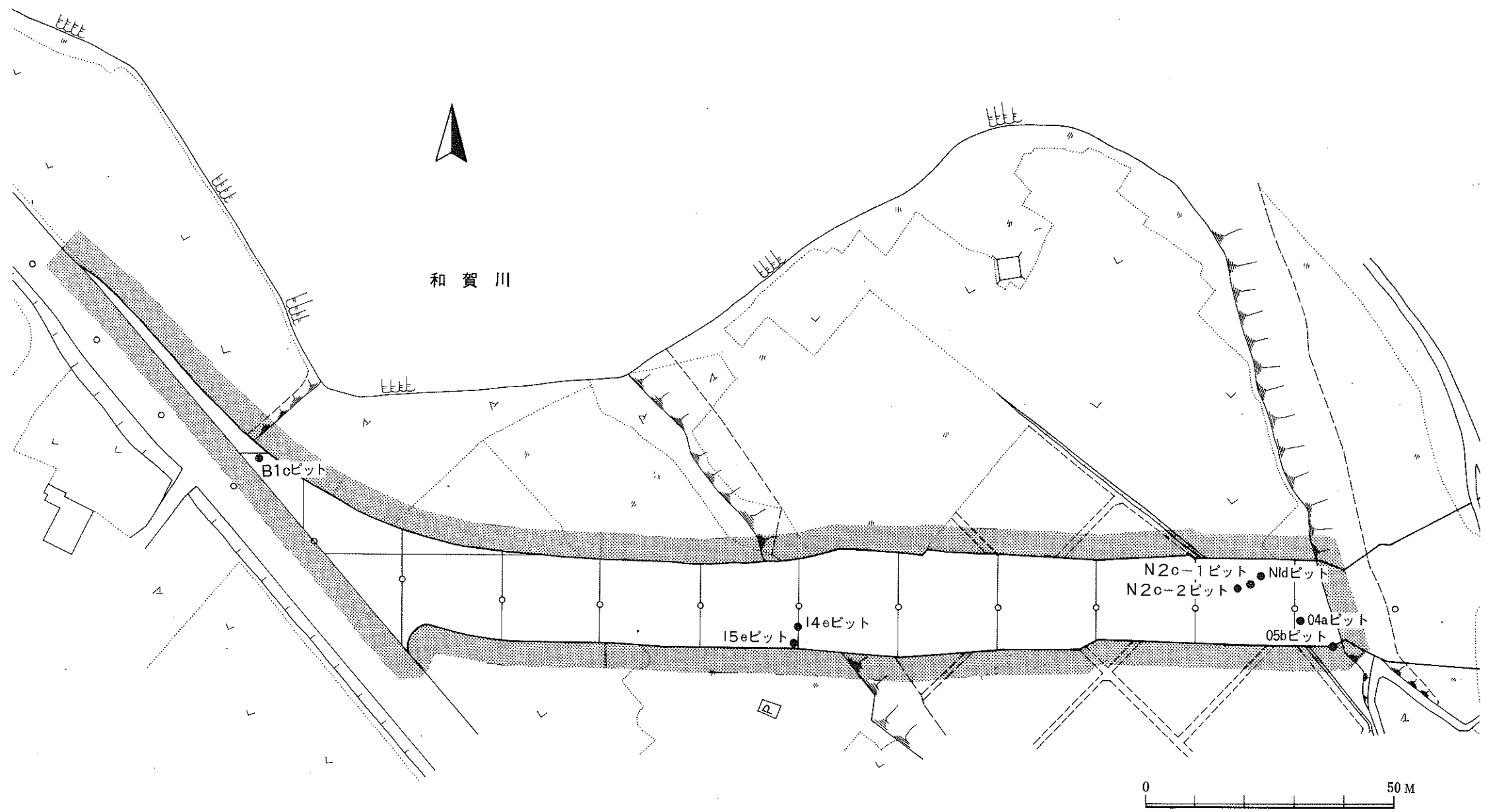


- | | | |
|-------------|------------|-------------|
| 1. 下岩沢遺跡 | 17. 鳥谷森遺跡 | 33. 九年橋遺跡 |
| 2. 岩沢Ⅰ遺跡 | 18. 岩沢館遺跡 | 34. 下成沢Ⅰ遺跡 |
| 3. 岩沢Ⅱ遺跡 | 19. 愛宕山遺跡 | 35. 下成沢Ⅱ遺跡 |
| 4. 岩沢Ⅲ遺跡 | 20. 田屋遺跡 | 36. 滝ノ沢地区遺跡 |
| 5. 法ヶ松Ⅰ遺跡 | 21. 吉沢遺跡 | 37. 梅ノ木沢遺跡 |
| 6. 和賀仙人遺跡 | 22. 福田遺跡 | 38. 岩崎城西遺跡 |
| 7. 切留Ⅰ遺跡 | 23. 館森遺跡 | 39. 岩崎台地遺跡 |
| 8. 切留Ⅱ遺跡 | 24. 蛭川館遺跡 | 40. 新田Ⅰ遺跡 |
| 9. 切留Ⅲ遺跡 | 25. 瀬の森古墳群 | 41. 新田Ⅱ遺跡 |
| 10. 切留Ⅳ遺跡 | 26. 田中館跡 | 42. 兵庫館遺跡 |
| 11. 和賀仙人西遺跡 | 27. 本郷遺跡 | 43. 法量野Ⅰ遺跡 |
| 12. 法ヶ松Ⅱ遺跡 | 28. 上長沼遺跡 | 44. 法量野Ⅱ遺跡 |
| 13. 人当Ⅰ遺跡 | 29. 蔵屋敷遺跡 | 45. 煤孫遺跡 |
| 14. 人当Ⅱ遺跡 | 30. 念仏車遺跡 | 46. 長沼古墳群 |
| 15. 人当Ⅲ遺跡 | 31. 鳩岡崎遺跡 | 47. 五条丸古墳群 |
| 16. 人当Ⅳ遺跡 | 32. 藤沢Ⅰ遺跡 | 48. 猫谷地古墳群 |

第3図 周辺遺跡分布図



第4図 下岩沢I遺跡グリッド配置図



第5図 下岩沢I遺跡遺構配置図

IV 検出された遺構と遺物

1. ピット

B1cピット

遺 構 (第6図、写真図版1)

この遺構は調査区最西端に検出された。

平面形は開口部・底部とも南北に長軸をもつ楕円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈する。埋土は、黒褐色土から黒色土の混土である。規模は開口部径95×120cm、底部径90×105cm、深さ75cmである。底面はほぼ平坦で、凹凸が認められる。

出土遺物 (第7図、写真図版4)

埋土から1と2の同一個体の土器が出土している。縄文時代晩期から弥生時代の土器の破片でLRの単節斜縄文が施されている。

I4eピット

遺 構 (第6図、写真図版1)

この遺構は調査区のほぼ中央部に検出された。礫層を掘り込んで構築されている。

平面形は開口部・底部ともほぼ円形を呈し、断面形は円筒形を呈する。埋土は黒褐色土の単層である。規模は開口部径100×105cm、底部径70×70cm、深さ85cmである。底面は壁際から中央部にむかって傾斜する。

遺物は得られていない。

I5eピット

遺 構 (第6図、写真図版1)

この遺構は調査区のほぼ中央に検出された。礫層を掘り込んで構築されている。

平面形は開口部・底部とも東西に長軸をもつ楕円形を呈し、断面形は円筒形を呈する。埋土は黒褐色土の単層である。規模は開口部径100×125cm、底部径70×90cm、深さ95cmである。底面は礫層面である。

遺物は得られていない。

N1dピット

遺構 (第6図、写真図版2)

この遺構は調査区最東端に検出された。

平面形は開口部・底部とも、南北に長軸をもつ楕円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈する。埋土は上位が黒褐色土で、下位が褐色土で構成される。規模は開口部径110×115cm、底部径65×80cm、深さ90cmである。底面は凹凸が激しい。

出土遺物 (第7図、写真図版4)

埋土から3のフレイクが出土している。不整形、肉薄のもので、刃部加工調整は認められない。石質は凝灰質珪質泥岩である。

N2c-1ピット

遺構 (第6図、写真図版2)

この遺構は調査区の最東端に検出された。

平面形は開口部・底部ともほぼ円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈する。埋土は上位が黒褐色土、下位が極暗褐色土で構成される。規模は開口部径100×110cm、底部径80×85cm、深さ95cmである。底面は礫層面である。

出土遺物 (第7図、写真図版4)

埋土から4の土器が出土している。粗製深鉢形土器の体部破片で、RLの単節斜縄文が施されている。この土器の時期については、厚み・焼成・施文などからみて縄文時代後期から晩期に位置づけられるものと思われる。

N2c-2ピット

遺構 (第6図、写真図版2)

この遺構は調査区最東端に検出された。

平面形は開口部・底部ともほぼ円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈する。埋土は極暗褐色土の単層であり、黒褐色土をブロック状に包含する。規模は開口部径115×125cm、底部径75×85cm、深さ85cmである。底面はほぼ平坦である。

遺物は得られていない。

O4aピット

遺構 (第7図、写真図版3)

この遺構は調査区最東端に検出された。

平面形は開口部・底部ともほぼ円形を呈し、断面形は円筒形を呈する。埋土は上位が黒色土で、下位が褐色土で構成される。規模は開口部径110×125cm、底部径55×60cm、深さ100cmである。底面は凹凸が激しい。

遺物は得られていない。

05bピット

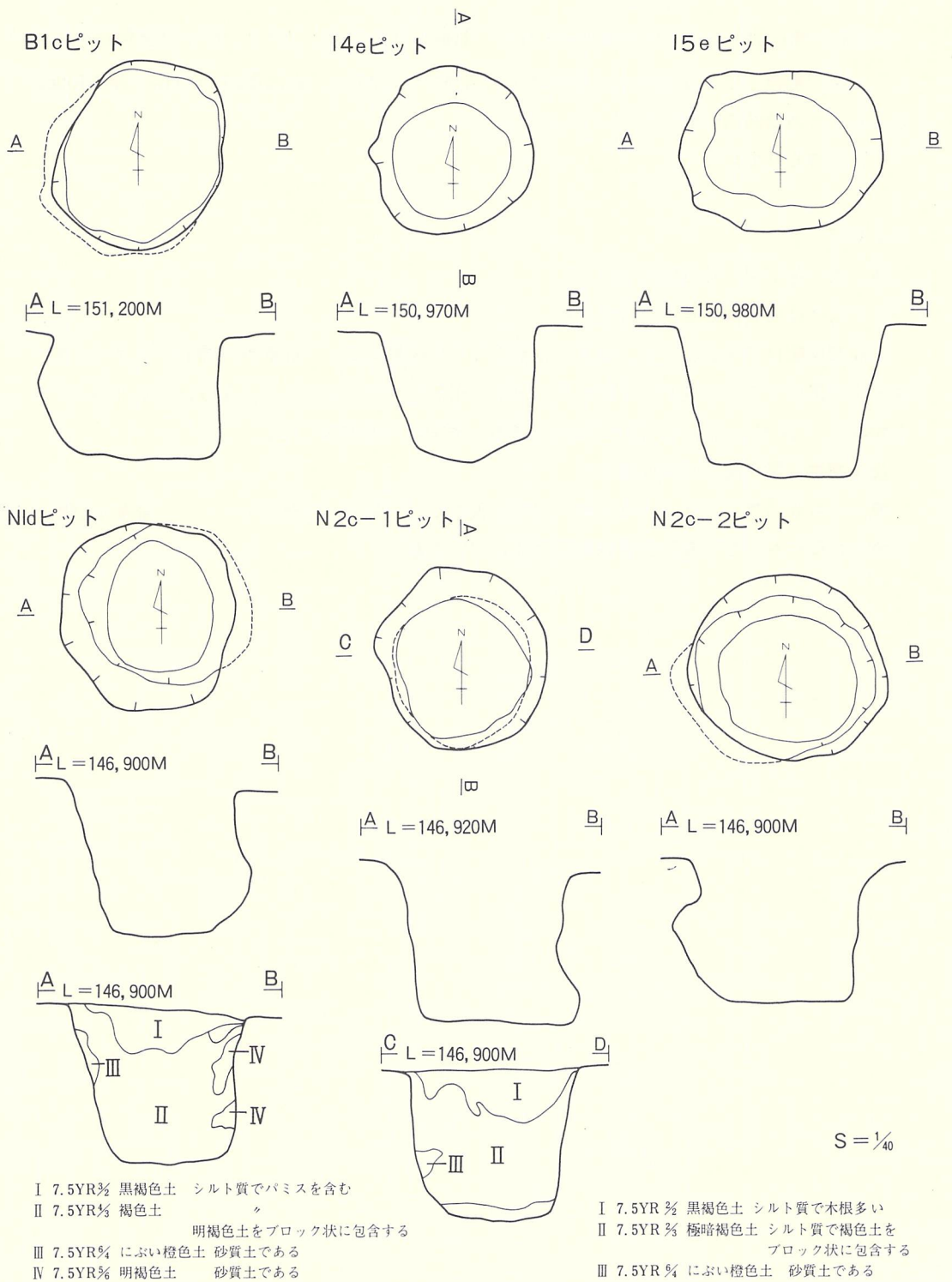
遺構（第7図、写真図版3）

この遺構は調査区最東端に検出された。

平面形は開口部・底部とも、南北に長軸をもつ楕円形を呈し、断面形は皿形を呈する。埋土は上位が黒色土で、中位から下位が黒褐色土と暗褐色土で構成される。規模は開口部径120×135cm、底部径75×95cm、深さ55cmである。底面は凹凸が激しい。

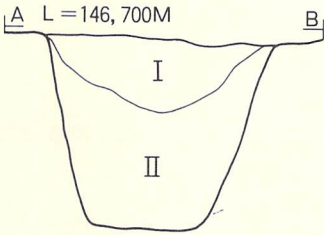
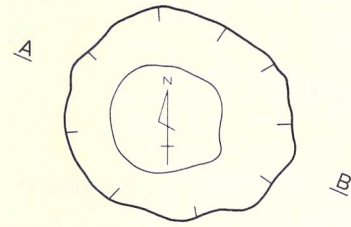
出土遺物（第7図、写真図版4）

埋土から5のフレイクが出土した。比較的大きく、不整形、肉厚のもので、刃部加工調整の認められないものである。石質は凝灰質珪質泥岩である。



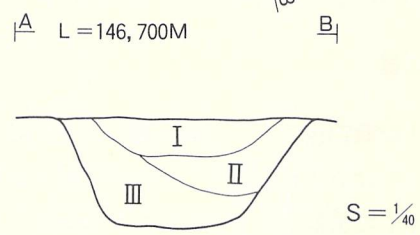
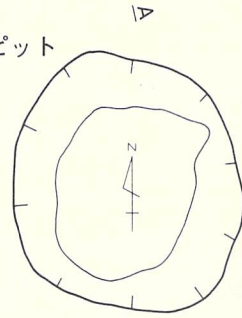
第6図 ピット(1)

04aピット

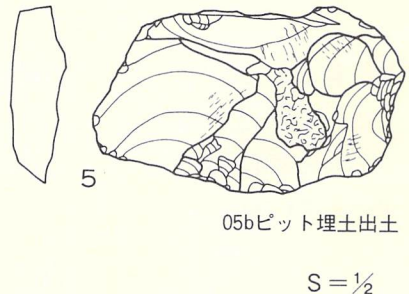
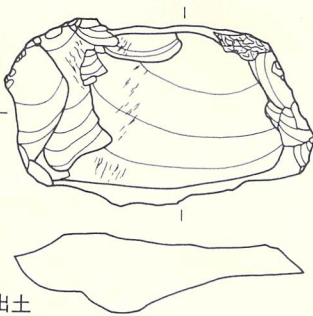
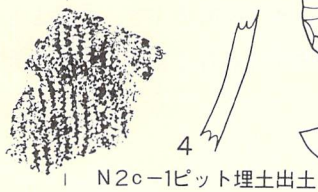
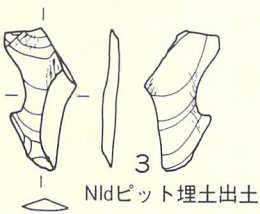
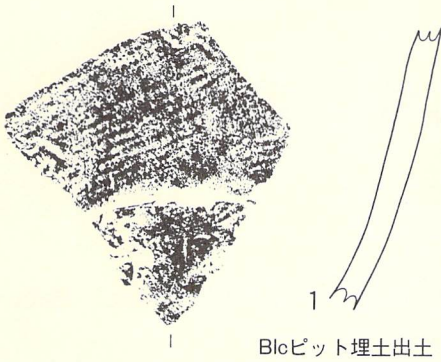


- I 7.5YR 8/ 黒色土 礫と木根を多く含む
明褐色土(7.5YR 8/6)をブロック状に包含する
- II 7.5YR 8/ 褐色土 礫を多く含む シルト質で砂質土を
ブロック状に包含する

05bピット



- I 7.5YR 8/ 黒色土 砂質土をブロック状に包含する
- II 7.5YR 8/ 黒褐色土
- III 7.5YR 8/ 暗褐色土



第7図 ピット(2) 遺構内出土遺物

V 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は、土器73点と石器30点である。遺物の出土が意外に少なかった要因は、調査区域が遺跡の主体部から外れていることにあると思われる。遺物の分布は調査区東端部のN区とO区を中心とする周縁である。

1. 土器

出土総数73点のうち、実測及び拓本に耐えられる土器26点について図示した。割愛したその他の土器はいずれも粗製土器の小破片である。

図示した土器は、下記のとおりに分類した。

第I群土器 縄文時代前期

第II群土器 縄文時代中期

第III群土器 縄文時代後期

第IV群土器 縄文時代晩期

第V群土器 縄文時代後期から晩期に位置づけられると思われる粗製及び無文の土器

第VI群土器 弥生土器

(1) 第I群土器 (第8図、写真図版4)

1～4の4点が出土している。これらの土器は胎土に繊維を含む厚手の土器で、焼成は良くない。いずれも粗製深鉢形土器の体部破片で、磨滅している。

1と2の土器は地文に単節斜縄文が施されている。2の器表には加熱による赤色変化が認められる。3の土器は地文に不整の単節斜縄文が、4の土器にはO段多条縄文が施されている。

これらの土器は胎土・地文から推定して、前期前葉に位置づけられるものと思われる。

(2) 第II群土器 (第8図、写真図版4)

5～8の4点が出土している。5は深鉢形土器の体部破片、6は口縁部破片で、2片とも平行な撚糸圧痕文が施文されている。7と8は粗製深鉢形土器の体部破片で、単節斜縄文が施されている。

(3) 第Ⅲ群土器 (第8図、写真図版4)

9の土器1点が出土している。深鉢形土器の大波状口縁突出部の破片で、無文である。胎土に砂粒を多く含むが焼成は良く、内外ともに研磨されている。

(4) 第Ⅳ群土器 (第8図、写真図版4)

10～15の6点が出土している。10は鉢形土器か台付鉢形土器の口縁部破片で、羊歯状文とその下に平行沈線が施文されている。器内外には煤が付着している。11は薄手の浅鉢形土器で、浮彫的な雲形文が施文されている。12は小型の深鉢形土器で、口縁部の平行沈線間に刻目をいれ、羊歯状の文様を作り出しているものである。13と14は鉢形土器の口縁部破片で、13には羊歯状文が、14には平行沈線間に刻目が施文されている。15は鉢形土器か台付鉢形土器の体部破片と思われるもので、単節斜縄文が施文されている。

(5) 第Ⅴ群土器 (第8図、写真図版4～5)

16～23の8点が出土している。いずれも深鉢形土器か鉢形土器の破片である。16には無節斜縄文が、17・19～23には単節斜縄文が施されている。18の土器は無文である。

(6) 第Ⅵ群土器 (第8図、写真図版5)

24～26の3点が出土している。24は細かい単節斜縄文を地文とし、沈線が横位に巡る。25は撚糸文を地文とする。26は横位の単節斜縄文を地文とする。

2. 石器

出土総数30点である。器種別にみると、尖頭器1点、石匙1点、スクレーパー3点、その他は剥片や石核などである。

(1) 尖頭器 (第9図、写真図版5)

1の1点が出土している。形状は柳葉状をなし、細身である。大きさは長さ7.8cm、幅1.8cmである。剥離調整は両面から入念に施されている。この尖頭器はG区の遺構検出の際、Ⅱ層の下位(Ⅲ層上面)まで下げた段階で出土したもので、出土した石器の中では最も古い層からの出土である。石質は珪質凝灰岩である。

(2) 石匙 (第9図、写真図版5)

2の1点が出土している。縦型をなし、やや幅広で、長身である。大きさは長さ8cm、幅2.6cmである。先端部は丸味をもつ。剥離調整は片面の縁辺部から入念に施されている。

石質は凝灰質珪質泥岩である。

(3) スクレーパー (第9図、写真図版5)

3～5の3点が出土している。3は板状の剥片を素材とし、1縁辺部は両面から、その他の縁辺部は主に片面から剥離調整が施されているものである。石質は凝灰質珪質泥岩である。4は不定形で、長さ4.3cmの小形のもので、剥離調整は主に片面から施されている。石質は粘板岩である。5は形状が隅丸方形を呈するもので、剥離調整は主に片面から荒く施されている。石質は珪質凝灰岩である。

(4) 使用痕の認められる剥片 (第9～10図、写真図版5)

6～11の6点が出土している。いずれのものにも明確な刃部加工調整は認められないが側辺・縁辺部に細かい剥離状の刃こぼれが連続して認められる剥片である。

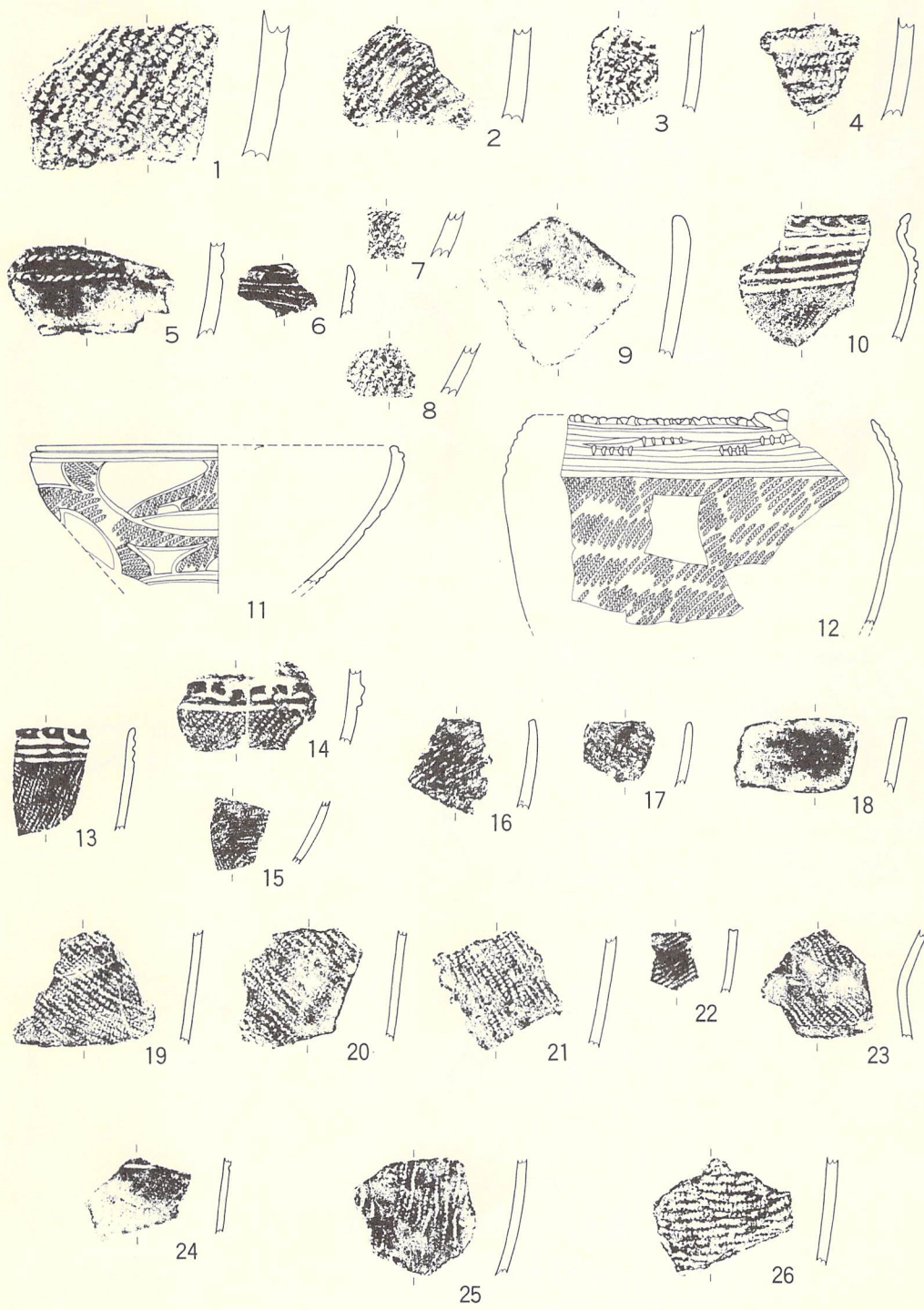
石質は6が流紋岩質極細粒凝灰岩、7が凝灰質珪質泥岩、8が珪質凝灰岩、9が流紋岩、10が珪質凝灰岩、11が凝灰質珪質泥岩である。

(5) 剥片 (第10～11図、写真図版5～6)

12～25の14点が出土している。いずれのものにも刃部加工調整が認められない。

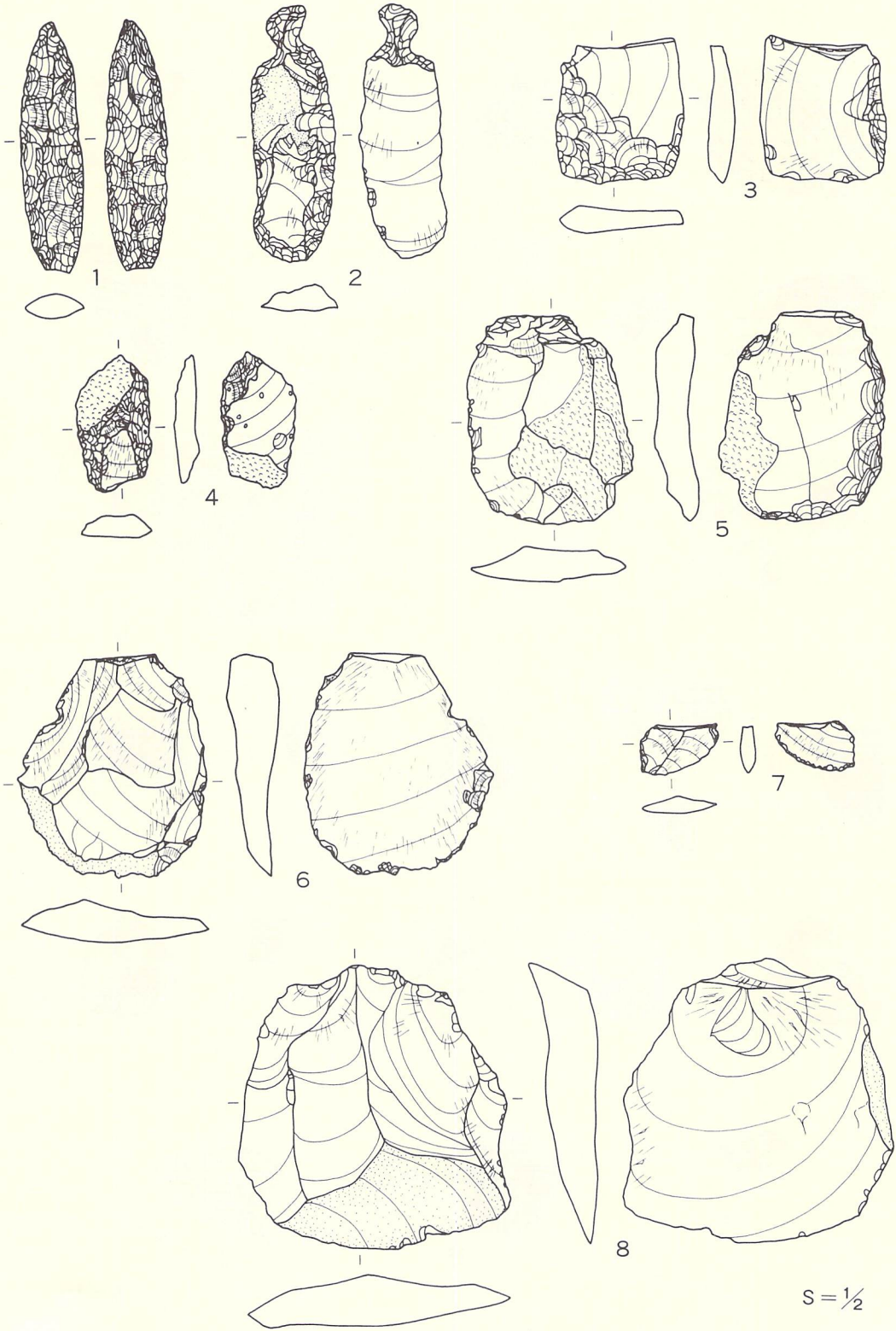
(6) 石核 (第11図、写真図版6)

26～28の3点が出土している。いずれも自然面を多く持つ残核である。27と28は同一のものと思われるが接合しない。石質は26が流紋岩質極細粒凝灰岩、27・28が凝灰質珪質泥岩である。

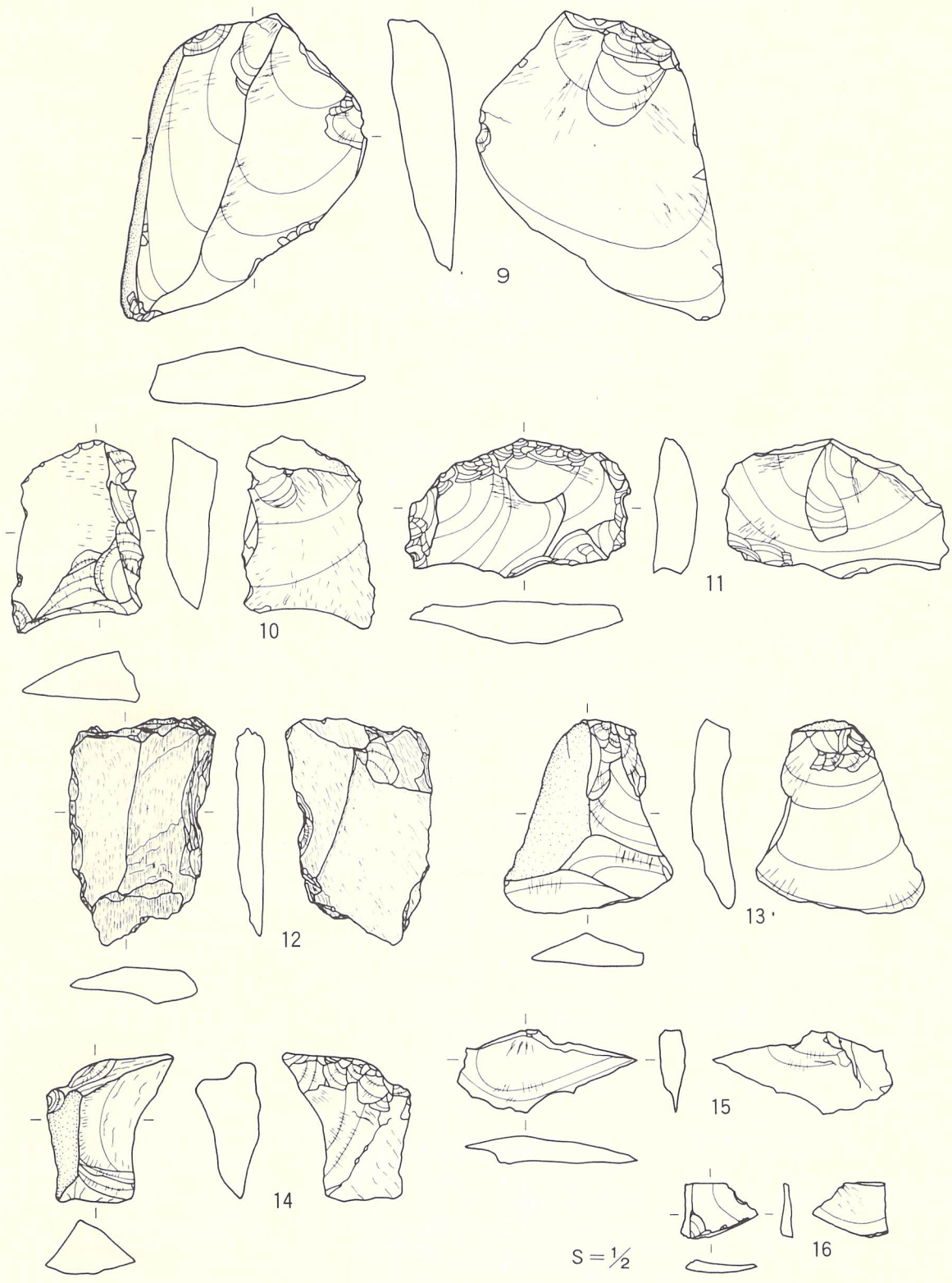


S = 1/3

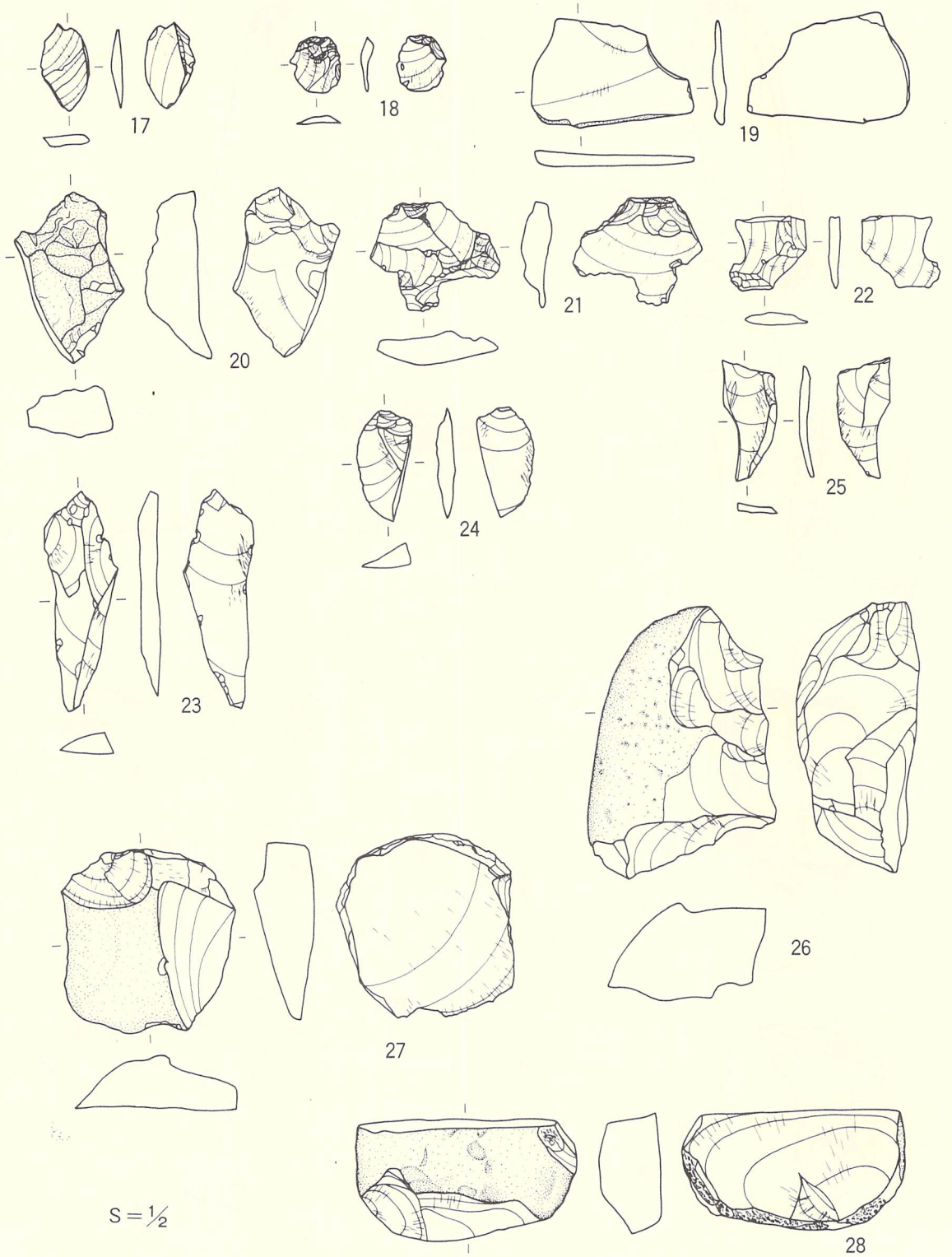
第 8 图 遺構外出土遺物 (土器)



第9圖 遺構外出土遺物 (石器1)



第10圖 遺構外出土遺物 (石器 2)



第11図 遺構外出土遺物 (石器 3)

VI まとめ

調査の結果、ピット8基が検出され、縄文土器、弥生土器、石器が若干出土した。これらの遺構や出土遺物について簡単に集約することとする。

1. 遺構について

検出されたピット8基を断面形で大別すると、フラスコ形を呈するものが4基、円筒形を呈するものが3基、皿形を呈するものが1基である。これらピットの占地をみると、フラスコ形を呈するものは地区の西端と東端に、円筒形を呈するものは中央部にまとまって検出され、占地を異にする傾向にある。規模についてみると、フラスコ形を呈するピットは開口部径105~120cm、深さ75~95cmの枠内に、また円筒形を呈するピットは開口部径103~117cm、深さ85~100cmの枠内にあり、どちらも同等の大きさのもので占められる。

2. 遺構内からの出土遺物と遺構の時期について

ピットから出土した遺物は、土器3点、石器2点である。調査区西端のB1cピットの埋土から出土した土器2点は縄文時代晩期か弥生土器と思われるもの、東端のN2c-1ピットの埋土から出土した土器1点は、縄文時代後期から晩期に位置づけられるもので、いずれも明確な時期を特定できなかった。

遺構の時期については、遺構外から出土した土器の分布と、上述した遺構内からの出土遺物から、縄文時代後期から弥生時代に位置づけられる可能性が強い。

3. 遺構外の出土遺物について

遺構外から出土した遺物は、土器73点、石器30点である。土器を時期別にみると、縄文時代後期から晩期の土器が半数以上を占め、次いで弥生土器が比較的多い。石器の出土状況をみると、出土しているのは剥片石器類のみで、礫石器は1点も出土をみない。

4. 遺跡の主体部と当遺跡との関連について

遺跡の周辺をみると、当遺跡の南西約300~400mには岩沢Ⅰ遺跡がある。この遺跡から当遺跡までは緩斜面から平坦面となって当遺跡に続き、すぐ和賀川右岸の縁となる。これら周辺の地形と当遺跡から検出された遺構の占地及び周辺の遺物分布状況から推測すると、遺跡の主体部は岩沢Ⅰ遺跡にあり、当遺跡はその範囲の周縁にあたる可能性がある。

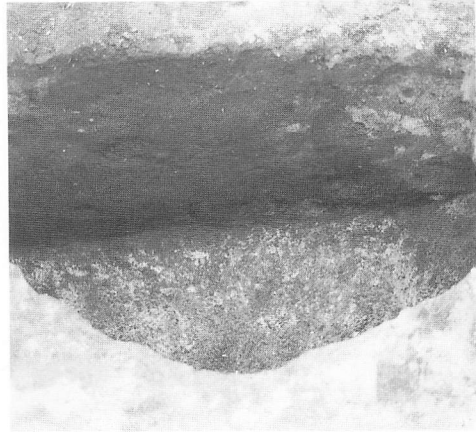
石器計測一覧表

No	図版番号 遺物番号	出土地点	器種	計測 (cm) (g)				石質
				最大長	最大巾	最大厚	重さ	
1	3	N 1 d ビット埋土	フレーク	4.3	3.9	0.8	20	凝灰質珪質泥岩
2	5	O 5 b ビット埋土	フレーク	6.4	5.0	1.2	46	凝灰質珪質泥岩
3	1	G 4 b グリッド II b 層	尖頭器	7.8	1.9	0.7	11	珪質凝灰岩
4	2	第 5 トレンチ粗掘	石 匙	8.0	2.5	0.9	17	凝灰質珪質泥岩
5	3	第 4 トレンチ粗掘	スクレーパー	4.2	4.0	0.9	21	凝灰質珪質泥岩
6	4	L 区中央西端	スクレーパー	4.2	2.3	0.7	8	粘板岩
7	5	E 区粗掘	スクレーパー	6.5	5.0	1.2	46	珪質凝灰岩
8	6	J 区粗掘	使用痕ある剥片	6.9	5.8	1.6	54	流紋岩質極細粒凝灰岩
9	7	N 3 b グリッド II a 層	"	2.4	1.5	0.5	2	凝灰質珪質泥岩
10	8	M 区北隅粗掘	"	8.9	8.1	1.5	110	珪質凝灰岩
11	9	N 区北西隅粗掘	"	10.4	7.2	1.9	135	流紋岩
12	10	第 1 トレンチ粗掘	"	5.6	4.0	1.5	39	珪質凝灰岩
13	11	O 区粗掘	"	4.3	7.1	1.4	50	凝灰質珪質泥岩
14	12	O 4 b グリッド粗掘	剥 片	6.9	4.6	1.1	40	粘板岩
15	13	O 区南半部	"	6.0	5.6	1.2	35	流紋岩
16	14	O 4 b グリッド粗掘	"	4.7	3.6	1.9	24	珪質凝灰岩
17	15	第 3 トレンチ	"	5.5	2.7	0.8	8	凝灰質珪質泥岩
18	16	N 4 d グリッド粗掘	"	2.4	1.8	0.3	2	凝灰質珪質泥岩
19	17	N C 2 グリッド II 層	"	2.7	1.5	0.4	2	凝灰質珪質泥岩
20	18	O 区南半部粗掘	"	1.8	1.5	0.4	1	凝灰質珪質泥岩
21	19	I 区崖際粗掘	"	5.2	3.4	0.4	8	珪質凝灰岩
22	20	N 3 c グリッド II a 層	"	5.4	2.7	1.7	27	チャート
23	21	N 区南端 I 層	"	3.4	4.1	0.9	9	チャート
24	22	O 4 a グリッド粗掘	"	2.3	2.3	0.4	2	凝灰質珪質泥岩
25	23	N O グリッド粗掘	"	6.7	2.1	0.6	9	凝灰質珪質泥岩
26	24	N O グリッド粗掘	"	3.5	1.7	0.5	3	凝灰質珪質泥岩
27	25	N O グリッド粗掘	"	3.8	1.7	0.3	2	流紋岩
28	26	O 区南半部粗掘	石 核	8.6	6.1	3.9	190	流紋岩質極細粒凝灰岩
29	27	第 1 トレンチ粗掘	"	5.8	5.2	1.9	70	凝灰質珪質泥岩
30	28	N 2 d グリッド粗掘	"	7.1	3.7	2.0	85	凝灰質珪質泥岩

写 真 图 版



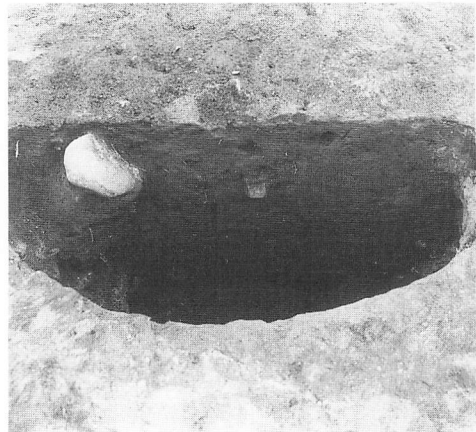
B1cピット平面



B1cピット断面



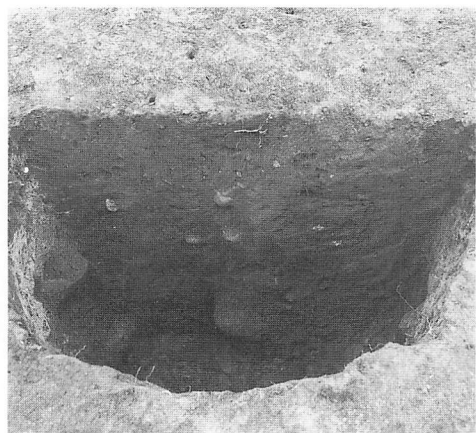
I4eピット平面



I4eピット断面

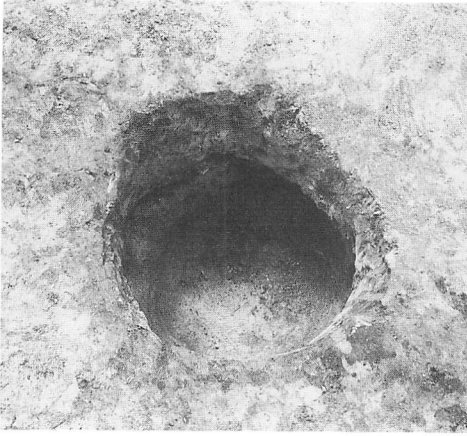


I5eピット平面

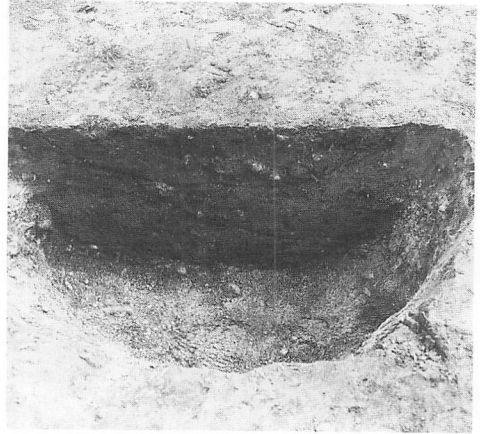


I5eピット断面

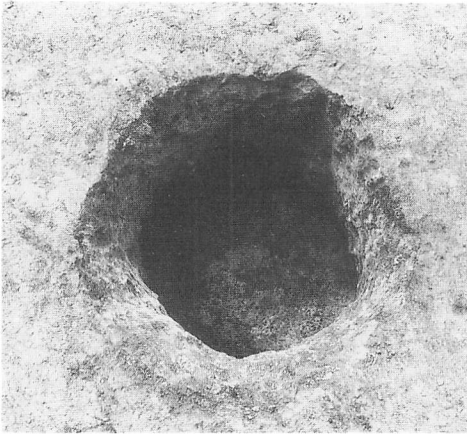
写真図版1 ピット(1)



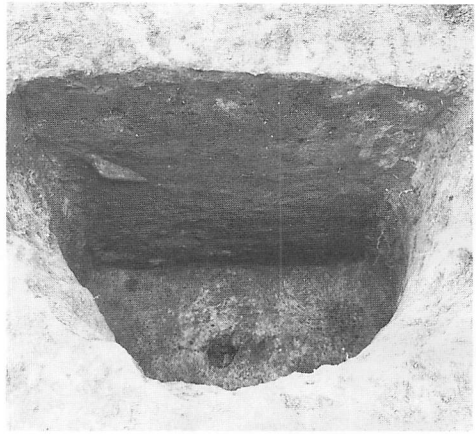
N1dピット平面



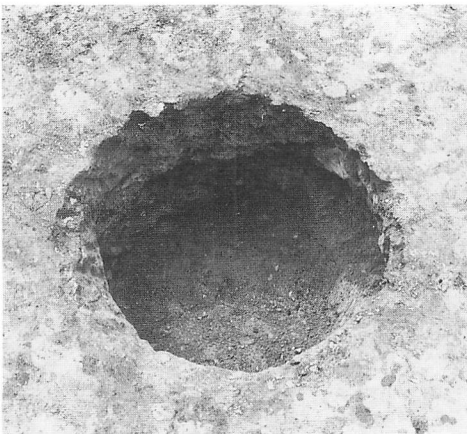
N1dピット断面



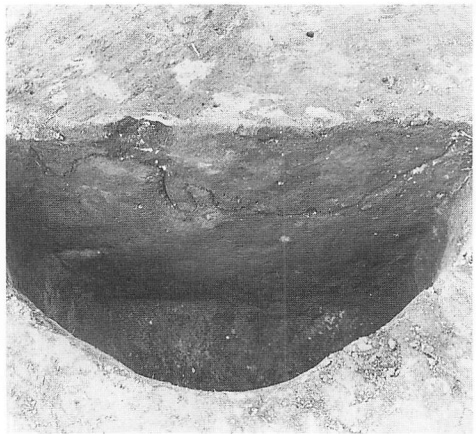
N2c-1ピット平面



N2c-1ピット断面

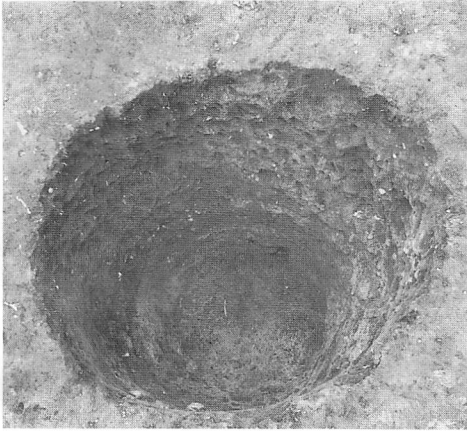


N2c-2ピット平面

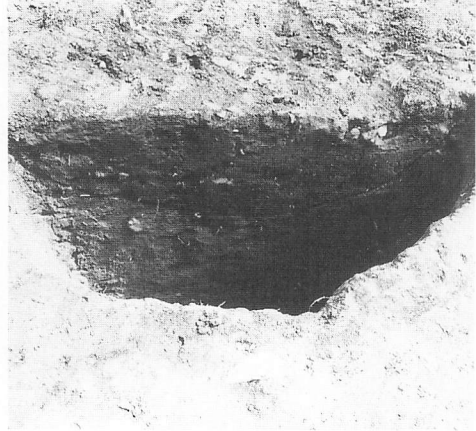


N2c-2ピット断面

写真図版2 ピット(2)



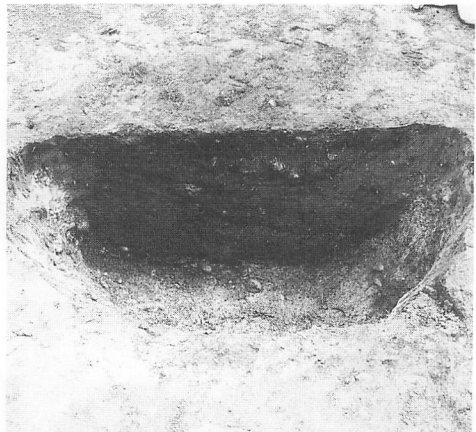
04aピット平面



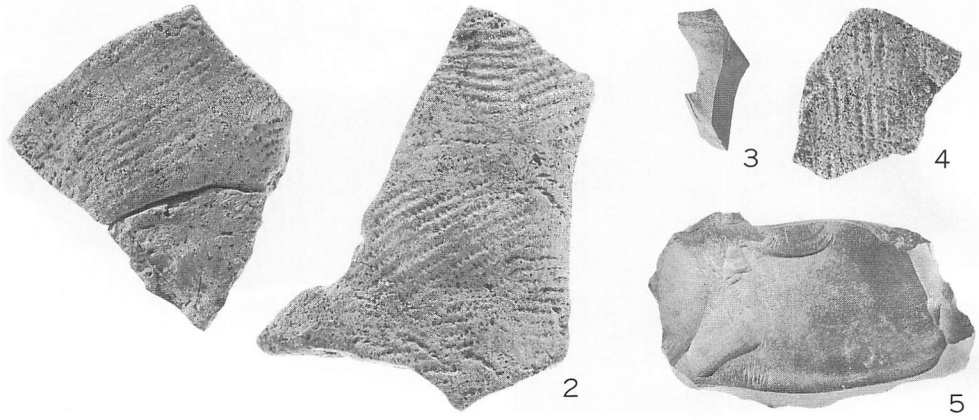
04aピット断面



05bピット平面

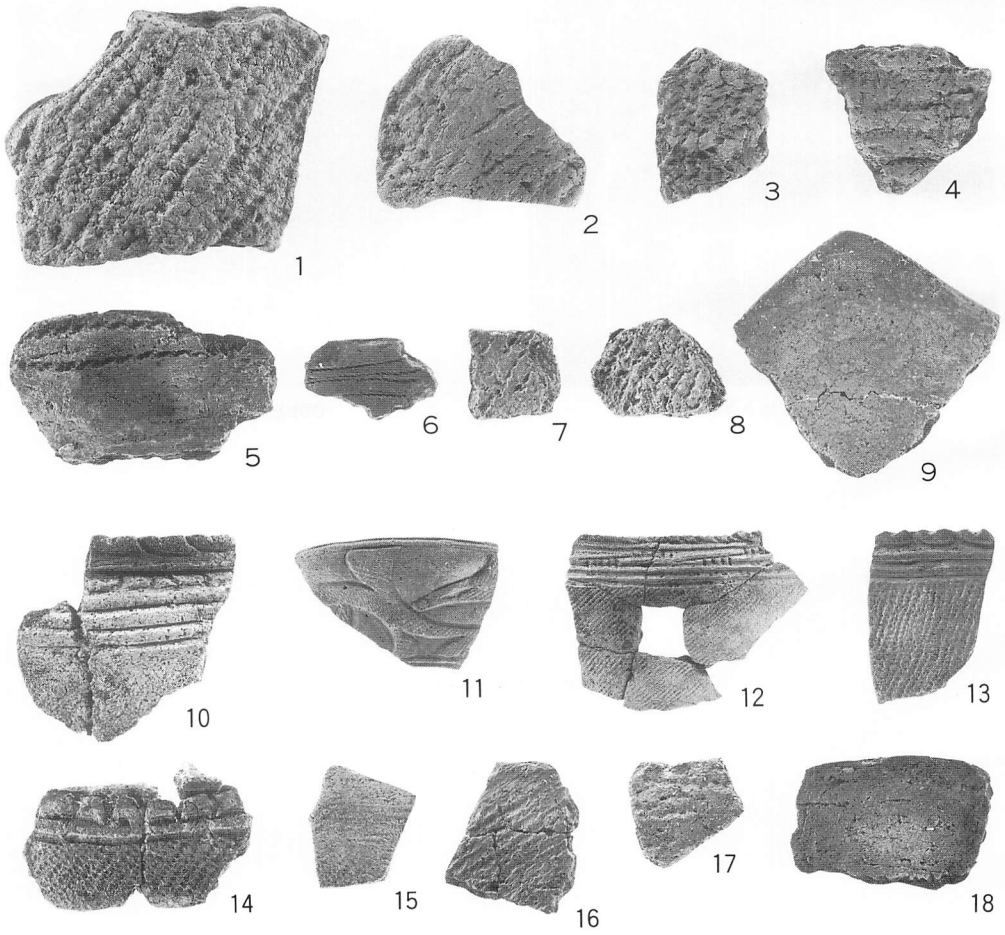


05bピット断面

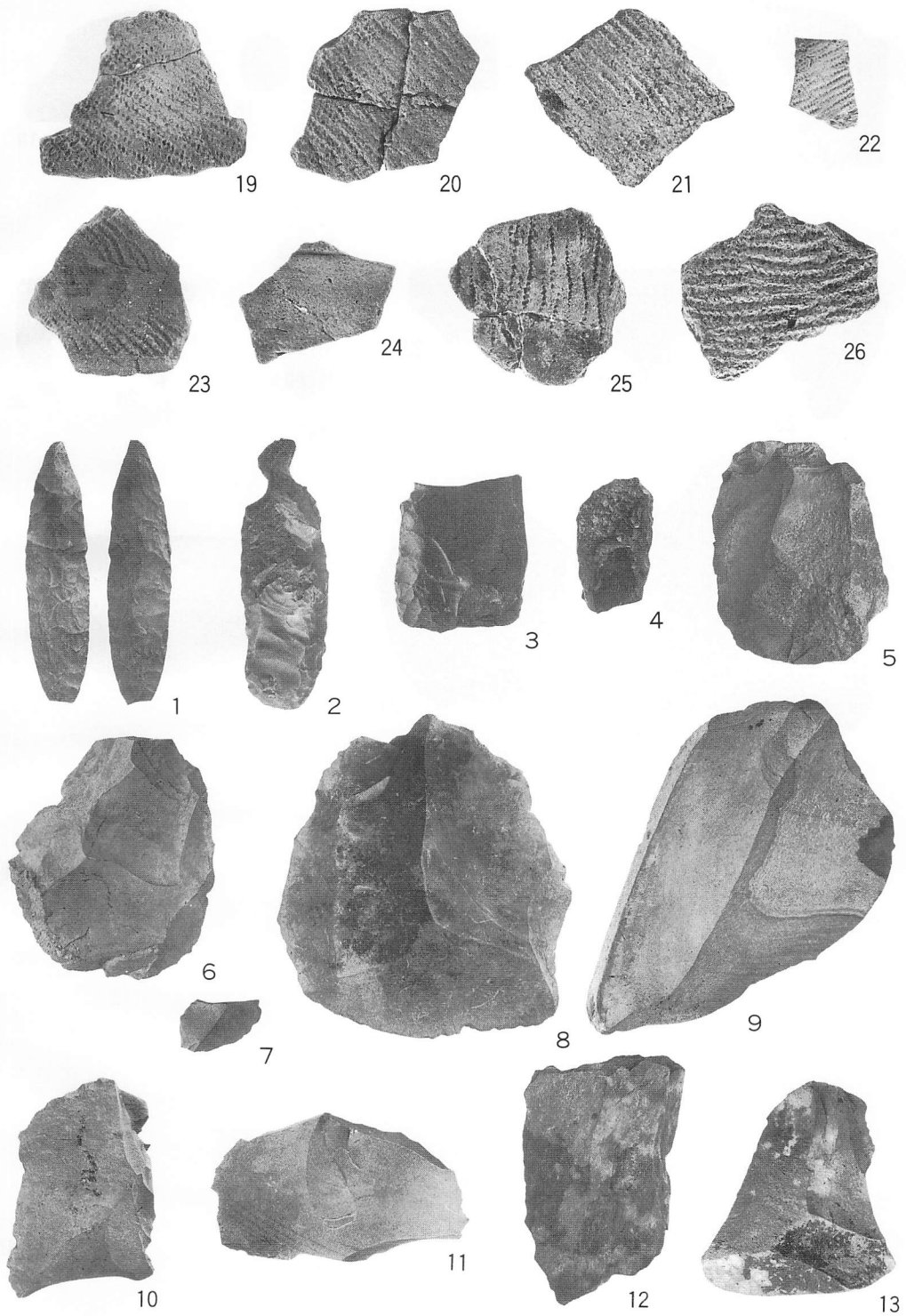


上 1～5 遺構内出土遺物

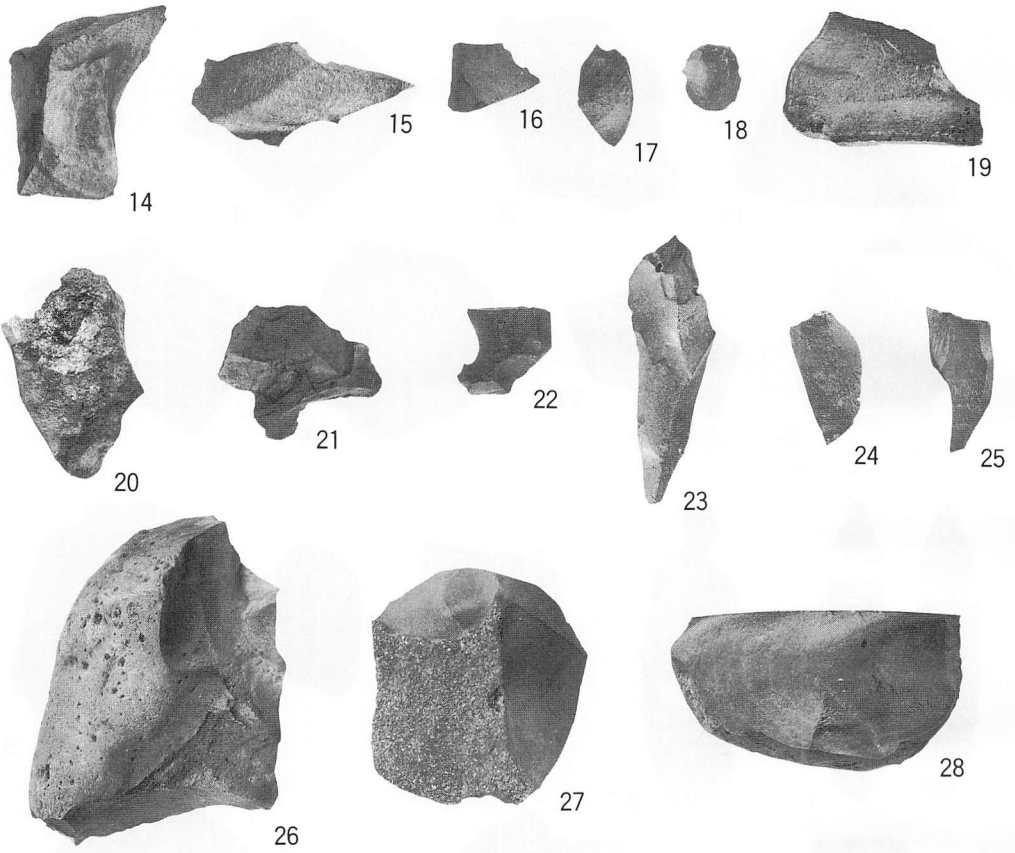
下 1～18 遺構外出土遺物



写真図版 4 遺構内・遺構外出土遺物(1)



写真図版 5 遺構外出土遺物(2)



写真図版 6 遺構外出土遺物(3)

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長 及 川 昌 二

副 所 長 鎌 田 良 悦

〔管理課〕

管理課長(兼) 鎌 田 良 悦

課長補佐 伊 藤 吉 郎

主 事 阿 部 隆 広

〔調査課〕

調 査 課 長 昆 野 靖

課長補佐 佐々木 嘉直

主任文化財 小田野 哲 憲

専門調査員 三 浦 謙 一

” 工 藤 利 幸

” 高橋 与右^ニ門

” 平 井 進

” 中 村 良 一

” 中 川 重 紀

文 化 財 藤 村 敏 男

専門調査員 齋 藤 實

” 光 井 文 行

” 佐 瀬 隆

” 齋 藤 博 司

” 東海林 隆 幹

” 佐々木 弘

” 川 村 均

” 鈴 木 貞 行

〔資料課〕

資 料 課 長 高 橋 薫

主任文化財 田 鎖 壽 夫

嘱 託 吉 田 一 男
運 転 技 士 佐 藤 春 男
兼 技 能 員

文 化 財 遠 藤 修
専門調査員

” 齋 藤 邦 雄

” 高 橋 義 介

” 佐々木 信 一

” 小 原 真 一

” 村 上 修

” 酒 井 宗 孝

期 限 付 菊 地 達 哉

専門調査員 相 原 伸 裕

” 及 川 靖 世

” 女 鹿 文 雄

” 濱 田 宏

” 及 川 涉

” 星 雅 之

” 森 下 宏

” 高 橋 堅

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第141集

下岩沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書
国道107号道路改良工事関連遺跡発掘調査

印刷 平成元年7月25日

発行 平成元年7月30日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡11-185

電話 (0196) 38-9001～2

印刷 株式会社 白ゆり学習社 印刷部

〒020-01 盛岡市みたけ6丁目1番50号

電話 (0196) 43-6060